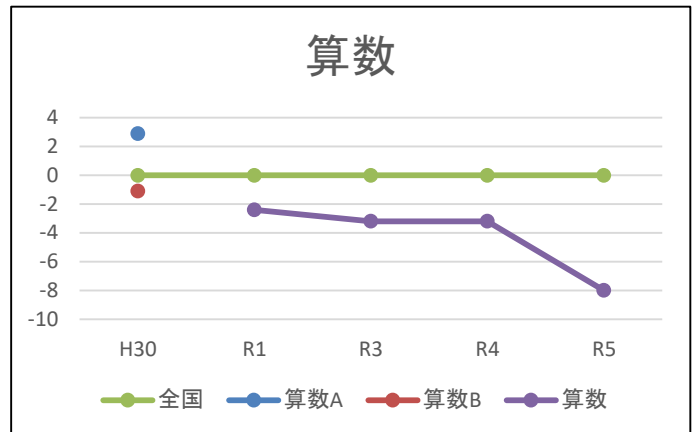
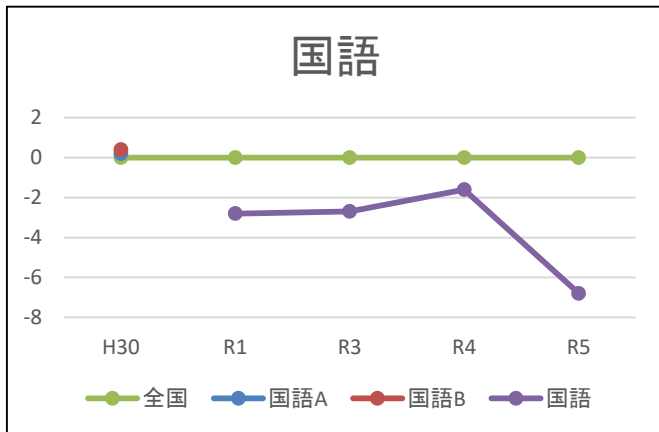
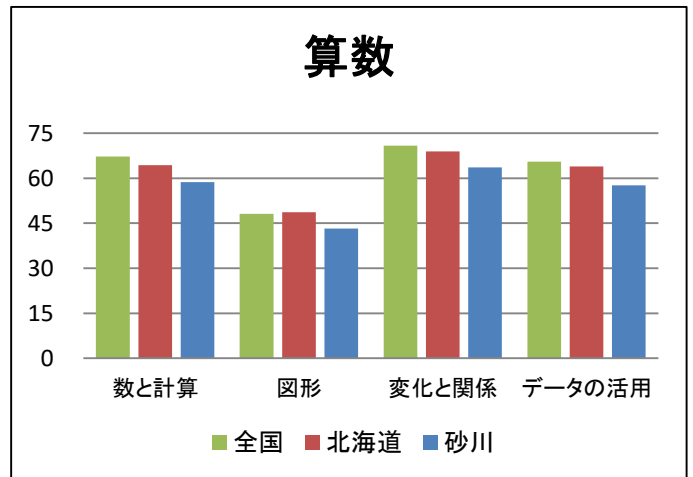
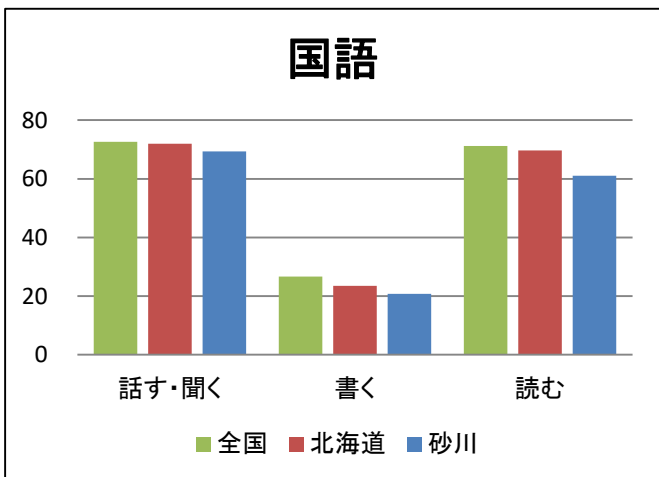


小学校（学校数：5校 児童数：77名）

1 平均正答率(全体)の経年推移

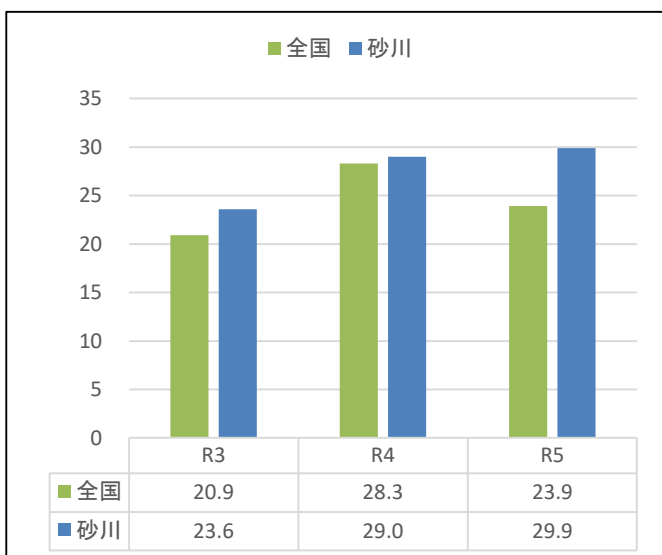


2 領域別平均正答率の状況

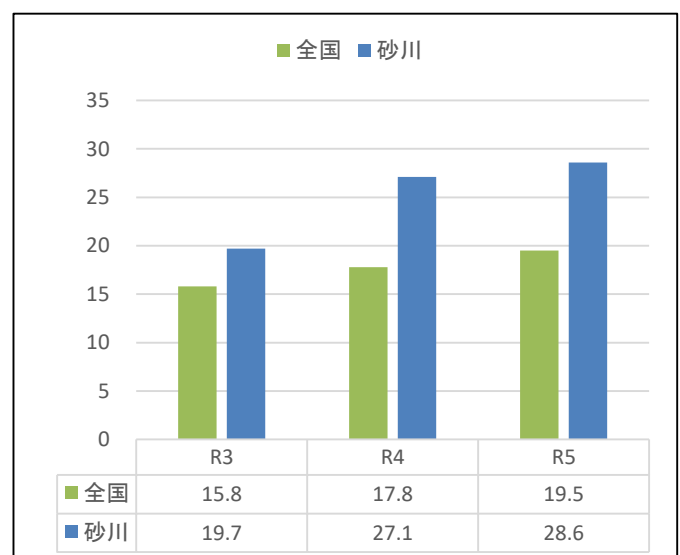


3 全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる児童の割合(努力を要する児童の割合)

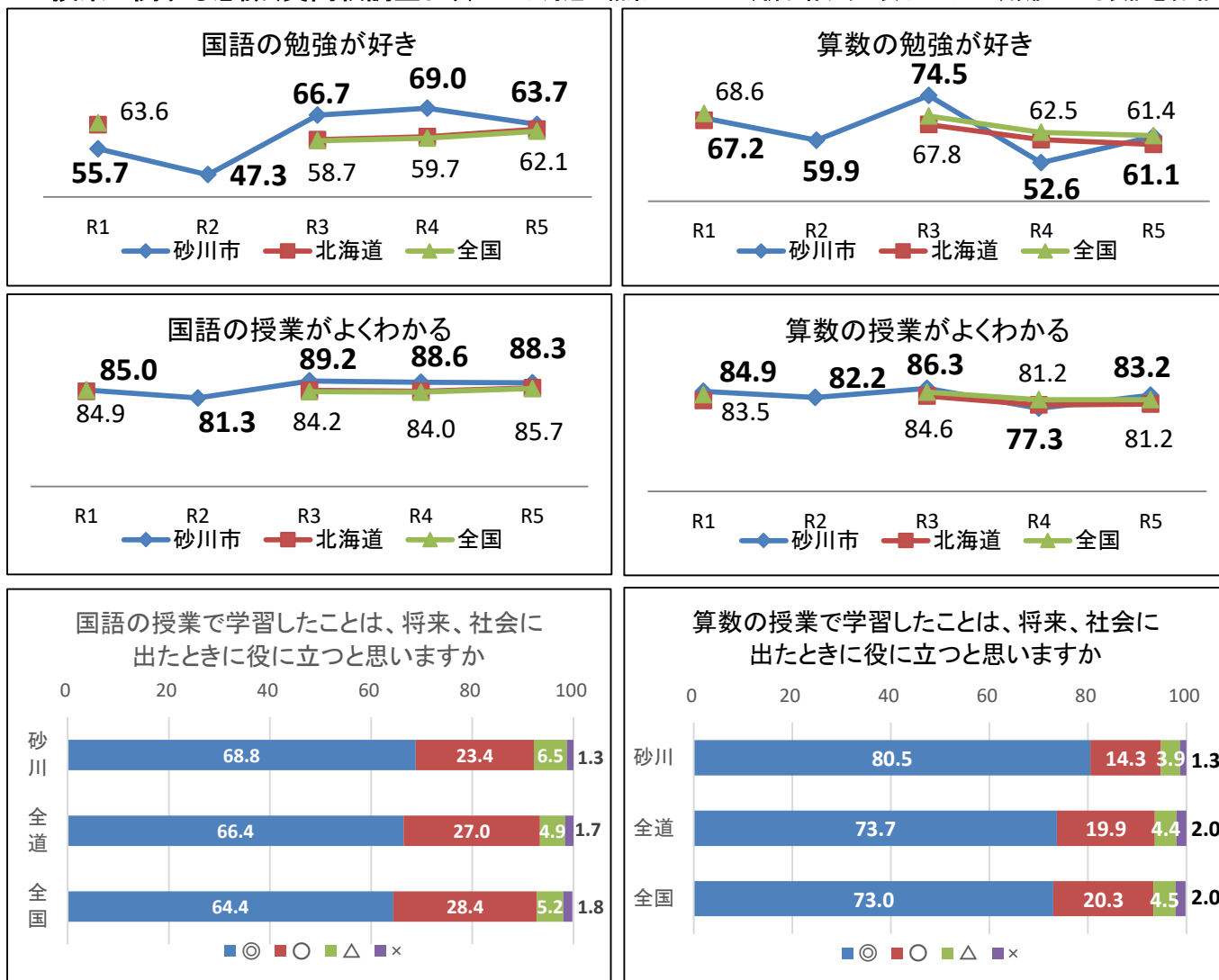
国語



算数



4 授業に関する意識(質問紙調査より) ※北海道の結果については、折れ線グラフ表示のみとし、数値による表記を省略



5 分析

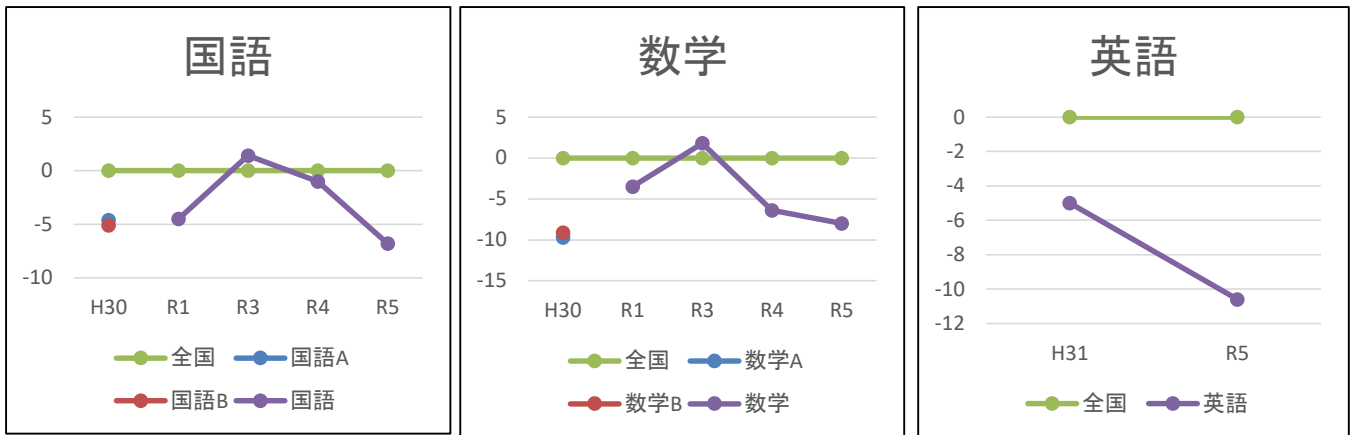
- 国語、算数ともに、全国平均を下回っている。
- 領域別の傾向としては、国語、算数ともに、どの領域も全国平均を下回る結果となっている。
- 全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる児童(努力を要する児童)の割合は、国語、算数ともに全国を上回っており、特に算数の割合が昨年度同様に顕著となっている。
- 国語の勉強が「好き」、という割合は全国平均を上回り、算数についても全国平均と同程度まで上昇した。教科学習に対する苦手意識をもたせず、丁寧な指導・支援を重ねてきた成果と考えられる。
- 国語、算数の勉強が「よくわかる」、という割合は全国平均を上回っており、各学校において、児童の実態に応じた発問や課題提示の工夫、ICT機器の効果的活用といった授業改善に取り組んできた成果と考えられる。
- 「学習したことは、社会に出た時に役立つ」と思っている割合は、国語は全国平均と同程度、算数は全国平均を上回っており、教科の有用性についての児童の実感が高い。

6 授業改善の視点

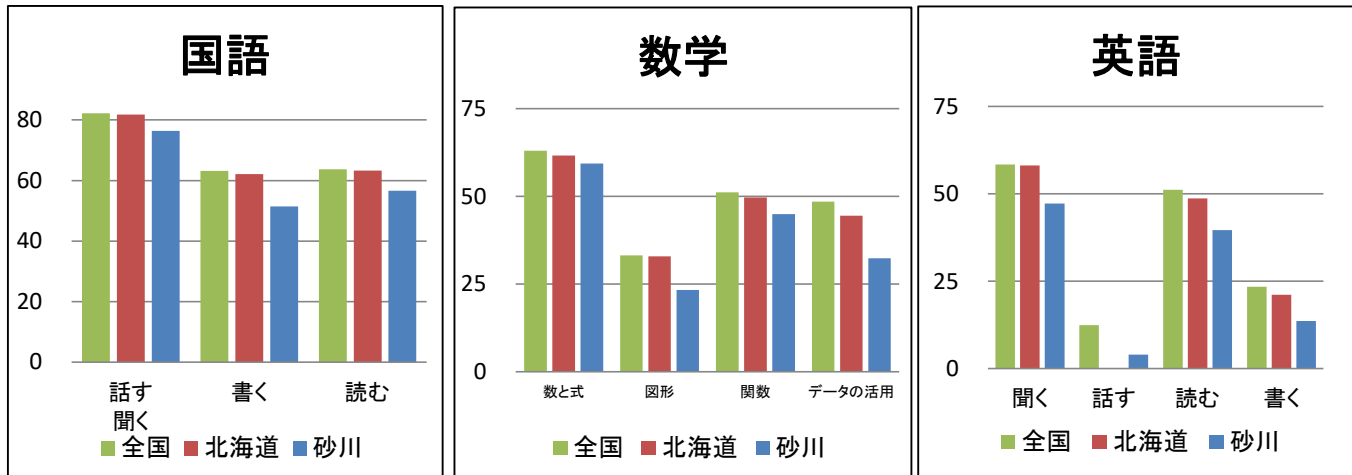
- 砂川市小学校学習スタンダードを踏まえた指導過程による授業改善の推進(課題把握、見通し、自力解決、交流、まとめ、ふり返り)
- 児童が思考したり、話し合ったり、交流したりする場面を意図的・計画的に取り入れ、十分な時間を確保した指導の工夫。(教師の端的な説明・指示、子どもの思考を深める発問の工夫など)
- 「表現する」(書く、説明する、思考ツールによって表すなど)ことを重視した学習指導の充実。

中学校（学校数：1校 生徒数：106名）

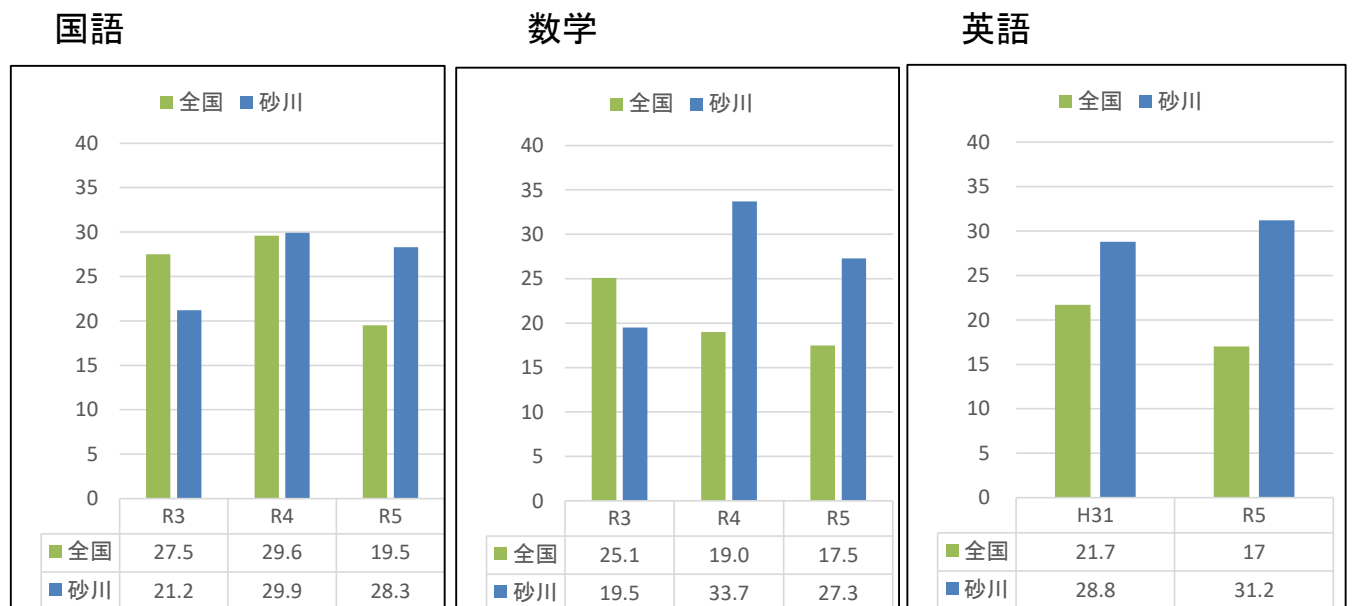
1 平均正答率(全体)の経年推移



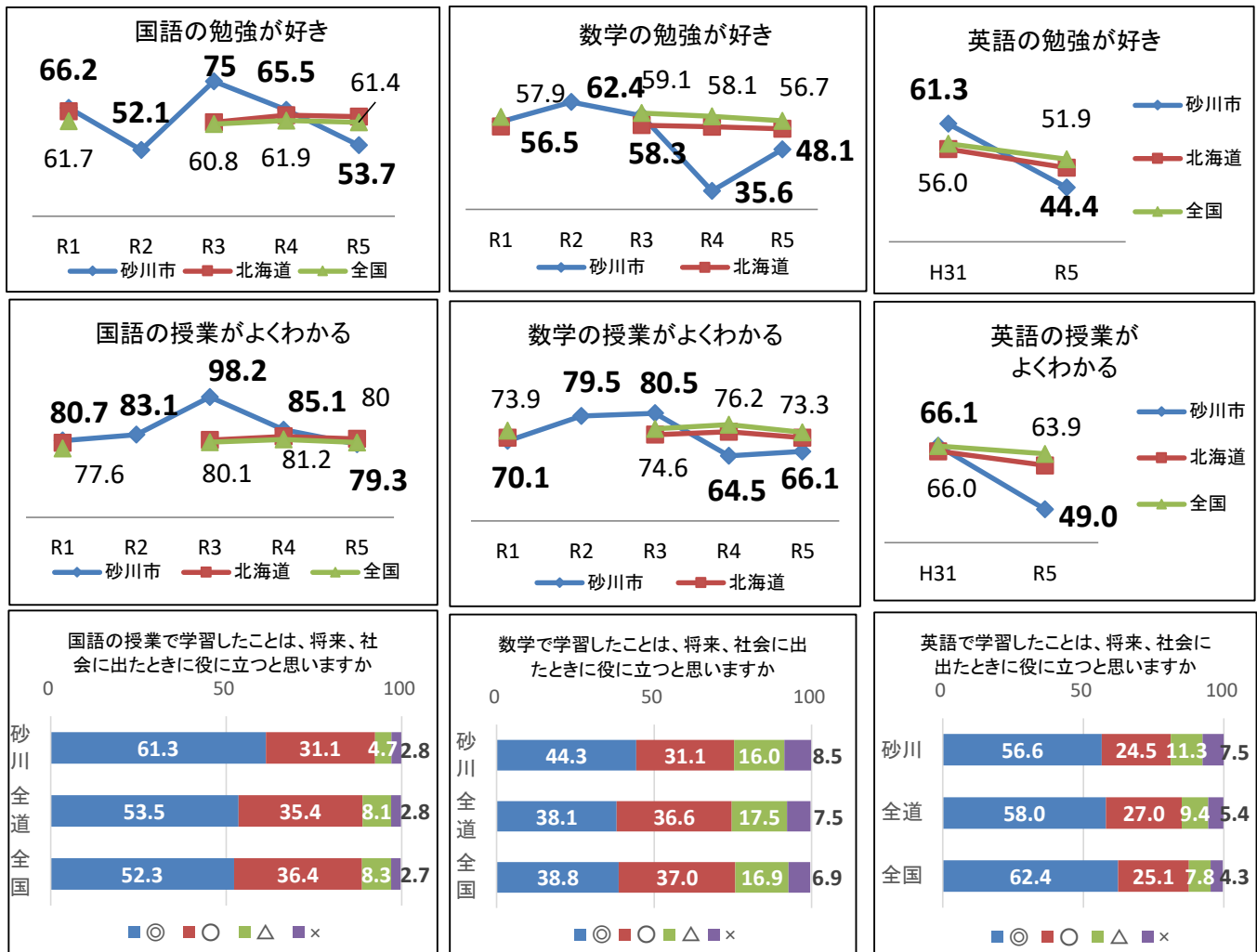
2 領域別平均正答率の状況



3 全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる生徒の割合(努力を要する生徒の割合)



4 授業に関する意識(質問紙調査より) ※北海道の結果については、折れ線グラフ表示のみとし、数値による表記を省略



5 分析

- 国語、数学、英語ともに全国平均を下回っている。
- 領域別の傾向としては、国語、算数、英語ともに、どの領域も全国平均を下回る結果となっている。
- 全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる生徒(努力を要する生徒)の割合は、いずれの教科も全国平均を上回っており、数学については若干全国平均との差が縮まったものの、特に英語は前回調査時からの差が顕著となっている。
- 「勉強が好き」という割合は、数学で上昇が見られたものの、全教科において全国平均を下回っている。
- 「授業がよくわかる」という思っている割合は、数学で若干上昇が見られたが、全教科において全国平均を下回っている。
- 「学習したことは、社会に出た時に役立つ」と思っている割合は、国語は全国平均を上回り、数学は全国平均と同程度となっているものの、英語は全国平均を下回っている。

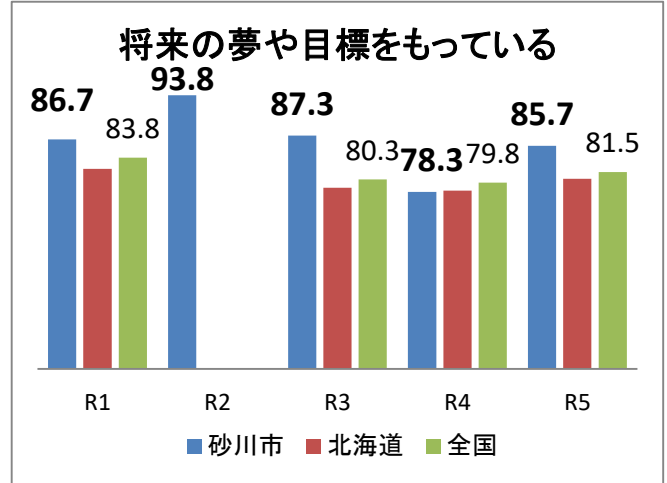
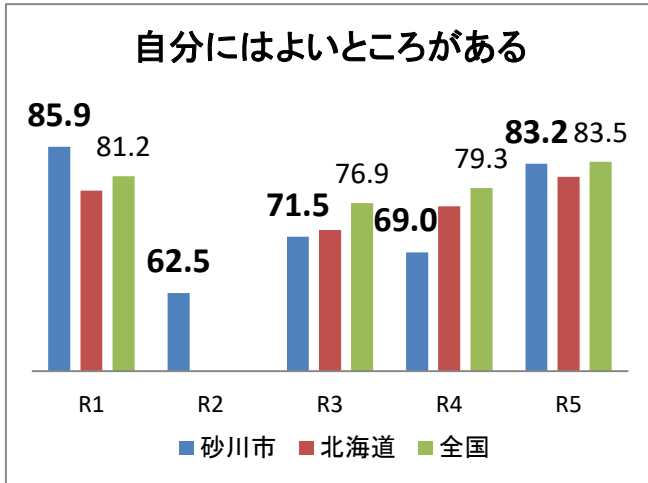
6 授業改善の視点

- 生徒が思考したり、話し合ったり、交流したりする場面を意図的・計画的に取り入れ、十分な時間を確保した指導の工夫。(教師の端的な説明・指示、子どもの思考を深める発問の工夫など)
- 課題解決への見通しをもたせ、終末時には課題解決が図られた実感をもたせるような授業づくりの推進。(「わかる・できる授業」の構築)
- 「表現する」(書く、説明する、思考ツールによって表すなど)ことを重視した学習指導の充実。
- 学習したことと日常生活や社会の中で活用されることがつながることを実感できる授業の実践。
- 学習過程や思考の流れを示す板書を工夫するなど、1時間の授業を振り返ることのできる板書計画の改善。

小学校質問紙調査（学校数：5校 児童数：77名）

※北海道の結果については、グラフ表示のみとし、数値による表記を省略

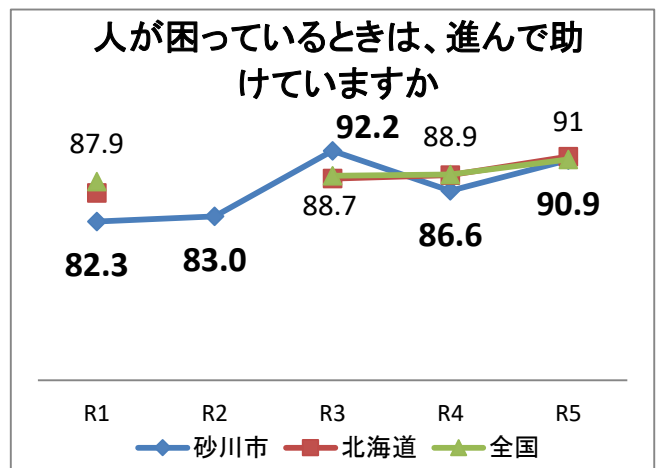
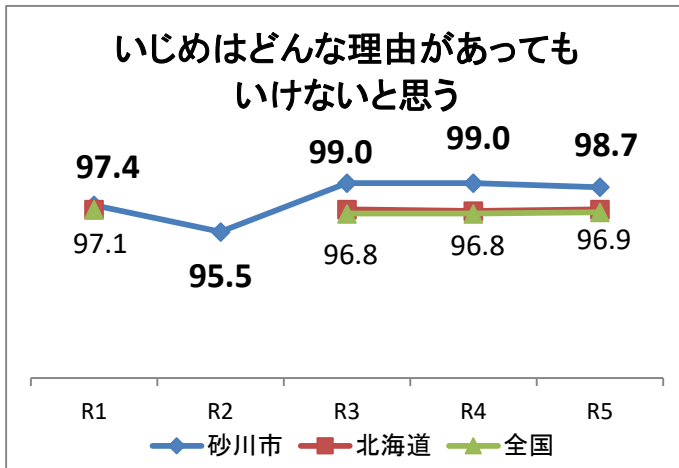
1 自尊感情に関する児童の状況



「自分にはよいところがある」と回答している児童の割合は、昨年度より大幅に上昇し、全国平均と同程度の状況であった。学校や家庭、地域の中で生徒が自らの有能感や有用感を高めていることの証左と考えられる。コロナ禍を経た今、改めて異学年を含む多様な他者との関わりや体験的な活動を通して、自分のよさに気付いたり、よさを実感したりすることから、自らに自信をもたせる教育活動を充実させていくことが大切であると考えられる。

「将来の夢や希望をもっている」と回答している児童の割合も、昨年度より大幅に上昇しており、全国平均を上回っている。外部人材を効果的に活用した学びやキャリアパスポートの効果的な活用などを通して、小学校の早い段階からのキャリア教育の一層の充実を図っていく必要がある。

2 規範意識に関する児童の状況

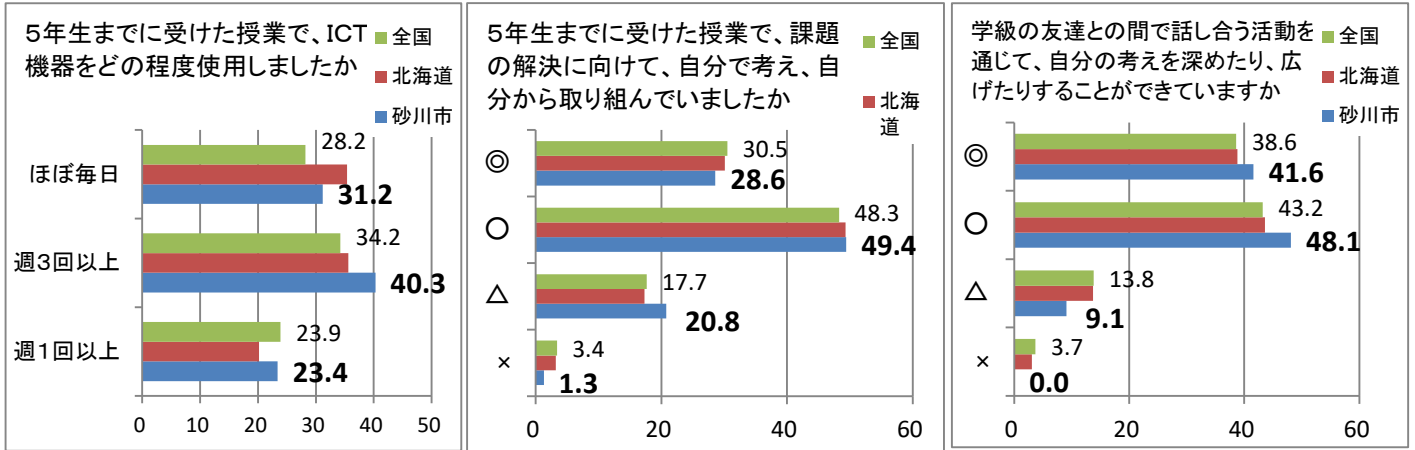


いじめに対する考え方は高い水準で安定しており、相手を傷つけたり、嫌な思いにさせたりしてはいけないということを理解している児童が多いといえる。今後も、全ての児童がいじめはどんな理由があっても許されない行為であり、お互いに嫌な思いをすることなく生活していけるよう、様々な場面を通して指導していくことが大切である。

また、困っている人を助けることの大切さを意識している児童の割合は昨年度よりも上昇し、全国平均と同程度の状況であった。他者を思いやる優しい心をもっていることが本市の児童の魅力であることを児童自身、保護者、地域住民と共有しながら、引き続き、児童のよさを伸ばすような指導・支援を行っていくことが重要と考える。

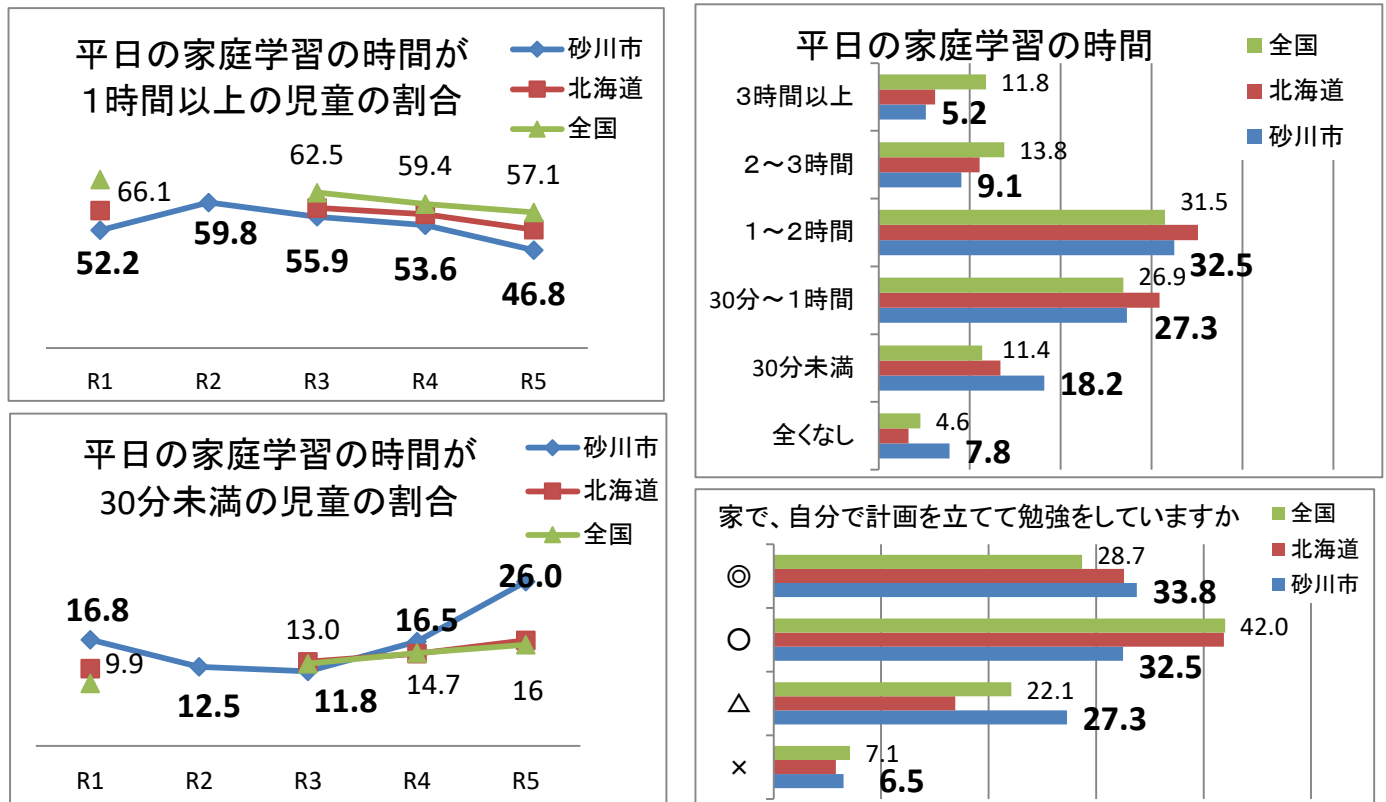
3 学習に関する児童の状況

(1) ICT機器の活用と主体的、対話的で深い学びの実現



ICT機器を活用している割合は、全国平均を上回っており、各校において、デジタル機器を積極的に学習活動等に取り入れていることがわかる。また、話し合い活動をとおして考えを深めたり、広げたりすることができていると回答した児童が多く、他者との関わりから学びを深める授業が行われているといえる。一方、主体的に課題解決に向かう意識には若干の課題が見られており、個人思考を促す学びの場面の設定や、課題解決の見通しをもたせる指導の充実が求められる。

(2) 家庭での学習状況



学習時間の質問からは、平日1時間以上学習している児童の割合が5割を下回った。また、平日30分以下の学習時間の児童の割合が大幅に上昇し、全国平均との差も開いた。平日の家庭学習の時間は1時間～2時間が最も多く、家庭学習の習慣がある程度定着していると思われる児童がいる一方、30分未満の児童の割合も高く、家庭学習の習慣が身に付いていない児童も相当数存在することがうかがわれる。

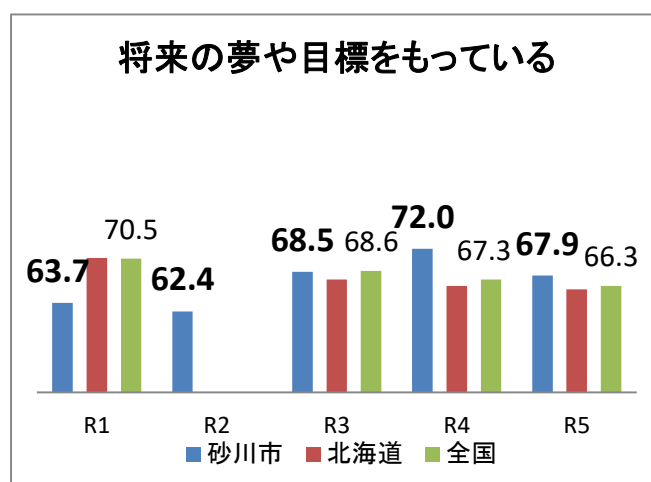
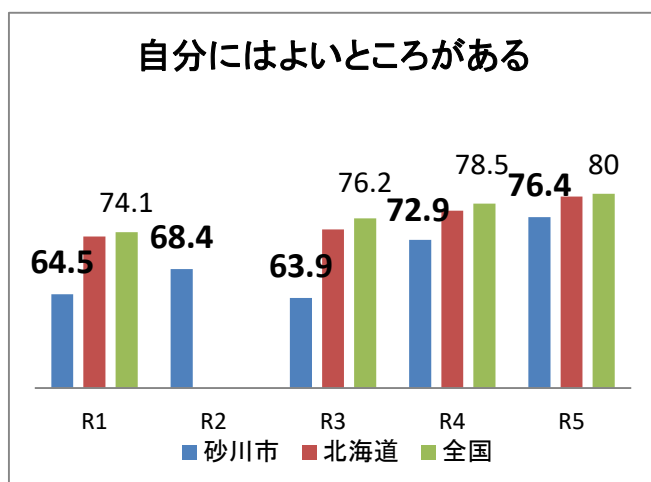
家庭学習の計画性については、できていると回答した児童の割合は全国平均を上回っている一方、あまりできていないとの回答割合も高く、二極化が見られる。

今後は、家庭学習の時間が30分以下の児童やどのように学習計画を立て、学習を進めればよいか困っている児童に対して、家庭学習の内容や計画のたて方など、取組方について、個別具体的に指導・支援をしていくことが重要であると考えられる。

中学校質問紙調査（学校数：1校 生徒数：106名）

※北海道の結果については、グラフ表示のみとし、数値による表記を省略

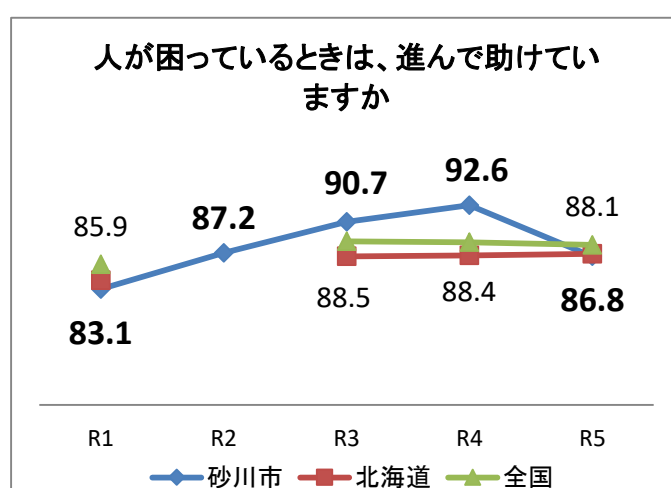
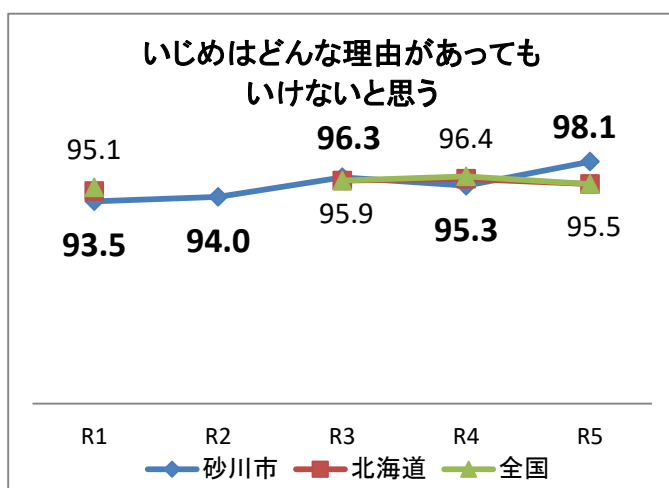
1 自尊感情に関する生徒の状況



「自分にはよいところがある」と回答している生徒の割合は全国平均を下回っているものの、昨年度より上回っており、学校や家庭、地域の中で生徒が自らの有能感や有用感を高めていることの証左と考えられる。コロナ禍を経た今、改めて人との関わりや体験的な活動を通して、自らのよさを発見し、自信をもたせるような教育活動を充実させていくことが大切であると考えます。

「将来の夢や希望をもっている」と回答している生徒の割合は、昨年度より低下したものの、全国平均も上回っている。今後も職場体験の充実や多様な人との関わりを通すなどして、中学校卒業後の進路を意識させた早い段階からのキャリア教育の一層の充実を図っていくことが大切である。

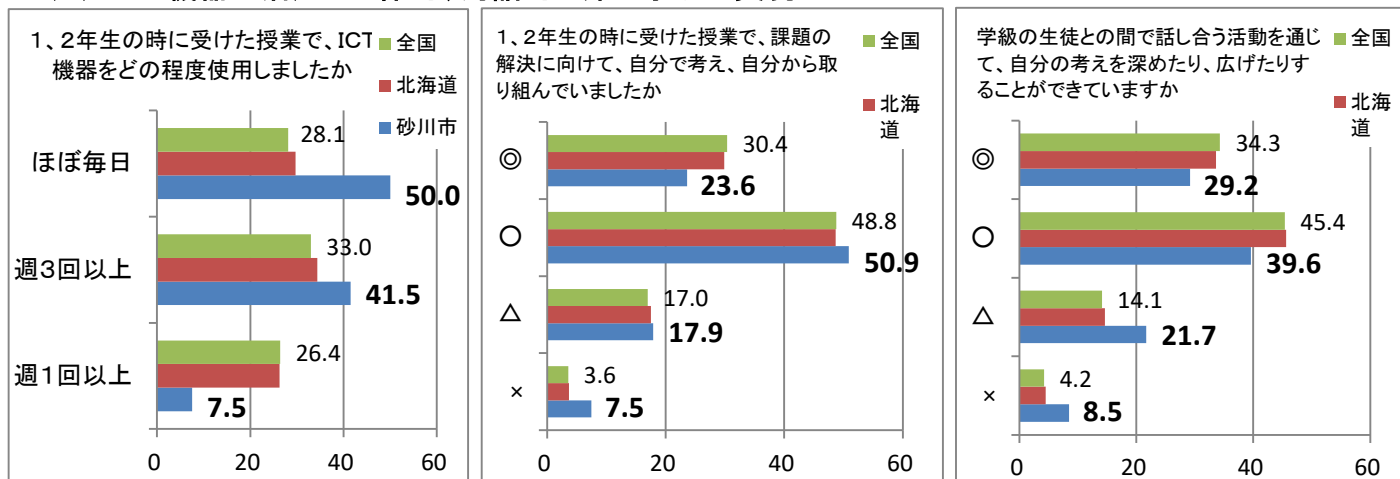
2 規範意識に関する生徒の状況



いじめに対する考え方はここ数年、上昇傾向がみられ、昨年度は全国平均を若干、下回ったものの、今年度は再び全国平均を上回った。一方、困っている人を助けることの大切さを意識している生徒の割合は全国平均を下回ったものの、ほぼ同程度の状況であった。心の成長が本市の生徒の魅力であることを生徒自身、保護者、地域住民と共有しながら、引き続き、いじめはどんな理由があっても許されない行為であり、お互いに嫌な思いをすることなく生活していけるよう、様々な場面を通して指導を継続していくことが重要と考えます。

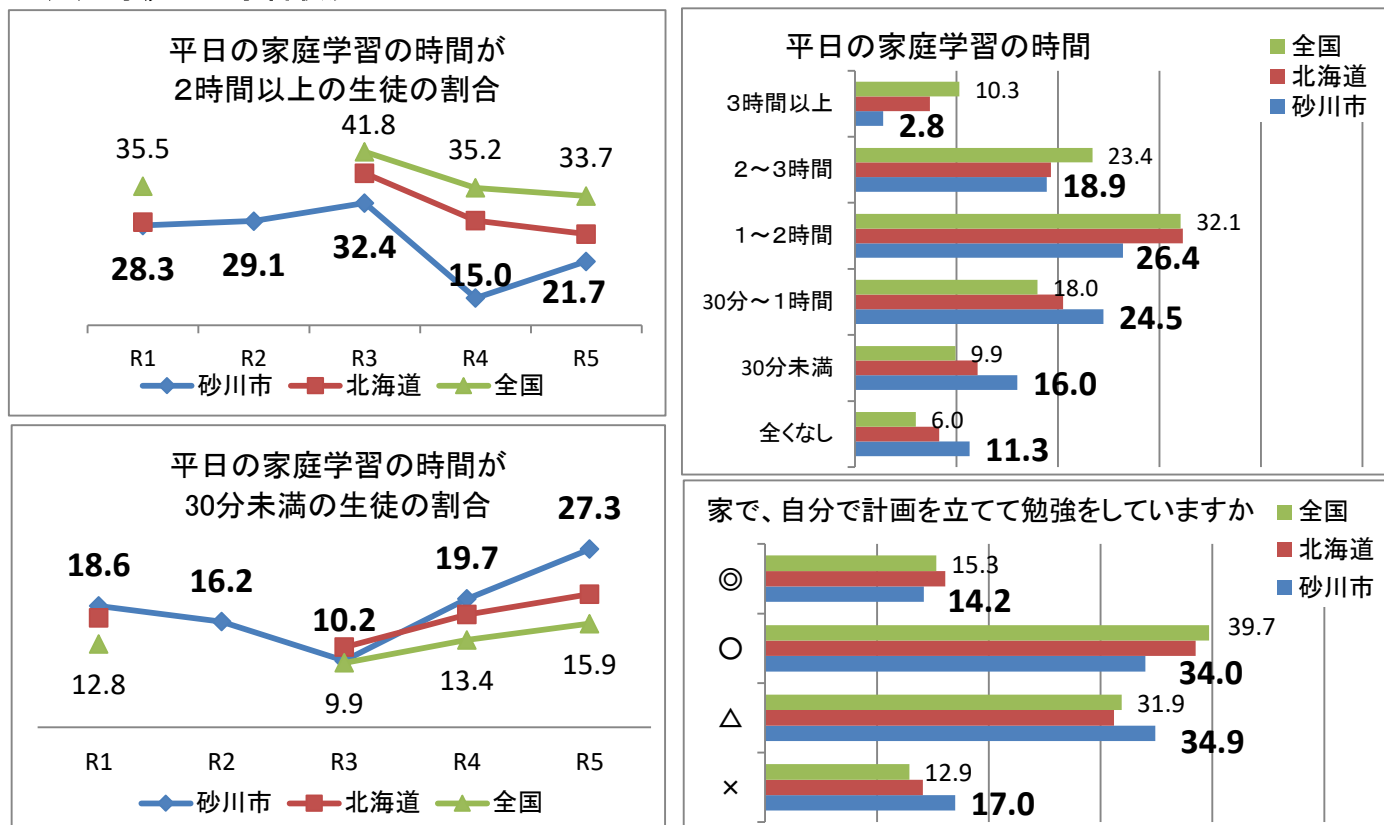
3 学習に関する生徒の状況

(1) ICT機器の活用と主体的、対話的で深い学びの実現



ICT機器を活用している割合は、全国平均を大きく上回っており、授業等においてデジタル機器の活用が進んでいることが分かる結果となっている。一方、主体的に課題解決に向かうことや、話し合い活動を通して思考を深めたり広げたりしながら、新たな見方・考え方に気付くことを重視する「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業改善の推進が課題といえる。授業構成の検討を含め、実践を通じた全校的な授業づくりが求められる。

(2) 家庭での学習状況



学習時間の質問からは、平日に2時間以上は学習している割合は、昨年度よりも上昇したものの、依然全国平均を下回っている。さらに、家庭学習の時間が30分未満の割合も全国平均を上回っており、その差は昨年度よりも広がっている状況にある。

また、家庭学習の計画性については、主体的に課題解決に向かう姿勢に課題が見られたこととの関連から、自分で計画を立てて学習している生徒の割合が全国平均を下回っている。結果からは、家庭学習習慣が十分に定着していないことが伺えるため、今後は、家庭学習を全くしない、家庭学習の時間が1時間以下の生徒に対して、家庭学習の内容、計画のたて方などの取組方について、具体的に個別指導をしていくことが必要である。

全体の傾向としては、家庭学習に取り組む時間が不足していることから、卒業後の進路を意識させながら、保護者との連携を深め、家庭における生活習慣の見直しとあわせて、学習に取り組む時間を確実に確保することが大切である。